

「インタラクションの文法」に向けて* — 現代日本語の疑似エビデンシャル —

定延利之

1. はじめに

「言語表現の意味は認知に基づいている」という考えは、今日では多くの言語研究者に共有されている。では、そこで用いられている「認知」という概念はどのようなものなのだろうか？ 世間一般の通念からすれば、認知とは環境の情報を受動的に受け取る行動と考えられそうだが、これとは逆に、認知とは能動的に情報を作り出す行動だとする考え方もあり得る。これら2つの認知観（以下「受動的な認知観」「能動的な認知観」）は基本デザインが大きく違っている。一郎が目の前にいるモノをネコだと認知する場合を例にとって紹介すると、目の前のネコの視覚情報（仮にそのネコが鳴けば聴覚情報、そのネコを触れば触覚情報、そのネコが臭ければ嗅覚情報、一郎がそのネコをなめてみれば味覚情報）を一郎がそのまま受け取って「ネコだ」と判断するのが認知だ、というのが受動的な認知観である（図 1a）。

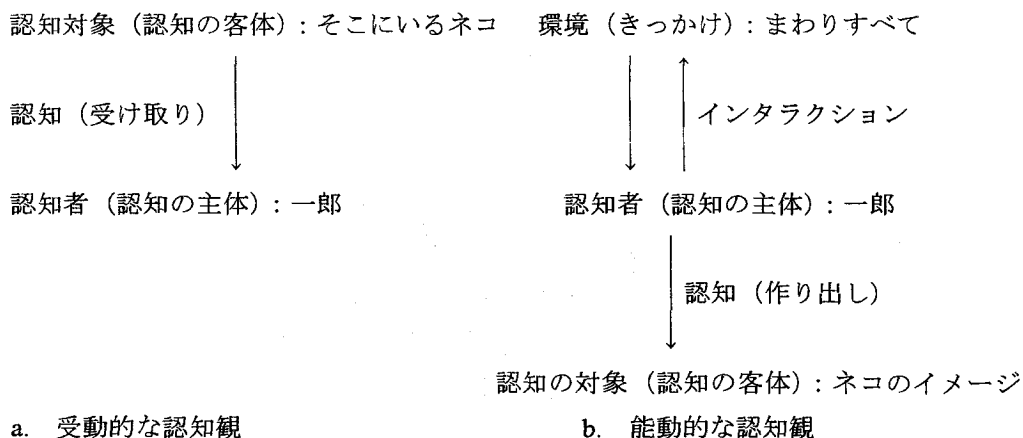


図 1：受動的な認知観と能動的な認知観（定延(2000:210)を一部改変）

これに対して能動的な認知観では、まず一郎と環境とのインタラクションを認める（図 1b）。ここで「一郎と環境とのインタラクション」と呼ぶのはたとえば「一郎が少し前に動けば、前方のモノはそれまでより大きく見え、においがよりきつく感じられる。一郎が左に動けば、前方のモノは机の脚に隠れて見えなくなる。一郎が右に動けば、いままで見えなかったモノの左面がよく見える」というような、「一郎が環境に対して働きかけると、環境がそれに応じて情報を一郎に返してくる」という働きかけ合いを指している。この環境とのインタラクションの中で、一郎が心内にネコのイメージを作り出すのが認知だ、というのが能動的な認知観である。そして、少なくとも言語研究外では、受動的な認知観よりも能動的な認知観の方が優れているということが広く認められている。

受動的な認知観よりも能動的な認知観が優れている点の一つは、環境と認知者とのインタラクションを認知に決定的な要因として組み込んでいる点である。実際のところ、環境との濃密なインタラクションがなければ、認知者は認知能力を十分に発達させられない。たとえばヘルドとハインの実験によれば（Held and Hein(1963)）、生後間もない子ネコを白黒の単調な縞模様しかない容器に入れても、容器内で子猫が自由に歩き回れさえするのなら、「抱きかかえられたまま水平面に降ろされそうになると、着地に備えて足をふんばる」「低い段差よりも高い段差を避けようとする」「急速に近づいてきた人間の手に反応して目をつぶる」などの行動をとることができるようになる。しかし、この子ネコの動きに合わせて移動するゴンドラに乗せられた別の子ネコは（図 2 参照）、このような行動をとれるようになることは難しい。

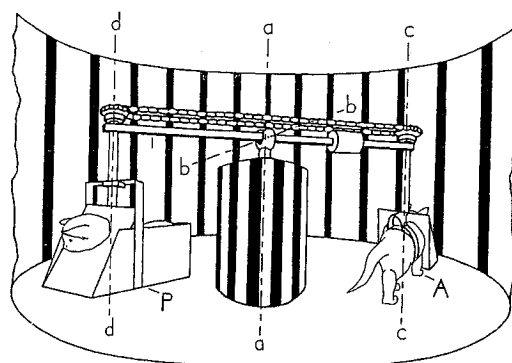


図 2 : Held and Hein(1963:873)で示された実験装置

子ネコの網膜に環境の視覚的な情報が伝わっているとしても、上のような行動をとれない子ネコについて「環境を視覚的に認知できている」と言うことはとてもできないだろう。「視覚的認知ができる」ようになるには、「自分が少し前に動いてみれば、前方の縞模様はそれまでより大きく見える」というような、環境とのインタラクションが欠かせない。

ところが、認知者と環境とのインタラクションの重要性は、言語研究では正に認識されているとはいえない状況にあり、認知主義的な研究のほとんどはイメージスキーマ関連の研究に偏ってしまっている。ここで言うイメージスキーマとは、人間が日常的経験を積む過程で人間の心内に発達してくる経験の鋳型である。たとえばネコのイメージスキーマは、人間が「ネコを見る」「ネコを触る」「ネコの絵本やビデオを見る」「ネコについて他人と会話する」といった日常的経験を何度も積むうちに心内にできあがった経験の鋳型である。目の前にいるモノがイヌなのかネコなのかを一郎が判断する場合、一郎はふつう、心内でイヌのイメージスキーマやネコのイメージスキーマを参照し、いま目の前にいる（と心内でイメージしている）モノとそれらを照合する。照合の結果、「イヌのような顔をしているが、ネコ」と判断されれば、「ネコにもこのような顔つきのものがいるのだ」と、一郎はネコのイメージスキーマを顔つきのバラエティに関して一部修正する。このように、イメージスキーマは、環境とのインタラクションにおいて認知者が利用したり修正したりする重要な心的資源である。イメージスキーマは、少なくとも 20 年以上前から重視され、プロトタイプカテゴリ・文法化・アイコニシティなどとの関連で活発に研究されてきている（たとえば Lakoff and Johnson(1980)・Lakoff(1987)・Johnson(1987)を参照）。これに対して、インタラクションそれ自体についての言語的研究は筆者の知るかぎりない。語や文のような言語表現の意味が話し手の認知に基づいており、認知の中核に環境とのインタラクションがあるのなら、われわれはもっとインタラクションに注意を向けるべきではないだろうか^{*1}。

さしあたり考えるべき問題としては、「環境とのインタラクションそれ自体が言語表現にどのような影響をなぜ与え得るか?」「そこに言語差は存在する

*1 環境とのインタラクションの中で認知者が環境に見いだすアフォーダンスに着目する言語研究が、一部で進められてはいるが（中川(1995)）、イメージスキーマと同様、アフォーダンスもインタラクション自体ではない。

か？ 存在するなら、どういう言語差がなぜ存在するか？」という問題が考えられる。後者の問題の検討は別稿（定延（近刊））に譲り、本稿は現代日本語（共通語）を使って、もっぱら前者の問題を検討する。次の第2節では、検討の前提となる概念として「知識」と「体験」を導入する。

2. 知識と体験

本稿で言う知識と体験はいずれも、言語によって表現される情報（以下「言語情報」）の下位類である。言語情報は共有可能性の程度に応じて、知識と体験に連続的ながら二分できる。典型的な知識とは、誰にでも共有され得る、公共の言語情報である。逆に、典型的な体験は、自己（ふつうは話し手自身）が専有するだけで他者が共有できない、共有可能性の極端に低い個人的な言語情報と言える（図3）。



図3：知識と体験

たとえば「地球は赤かった」という文をとりあげてみよう。「現在は青いが、太古の昔は地球は赤かった」と言う場合、「地球は赤かった」は誰にでも共有され得る情報を表現している。つまり、誰でも（それなりのデータを集めれば）「たしかに昔、地球は赤かった」などと賛同したり、「いや、地球は昔から青かった」などと反駁したりでき、「地球が赤かったかどうか」を問題にできる。したがって情報の共有可能性は高い。本稿では、このような言語情報を知識と呼ぶことにする。

他方、宇宙飛行士が地球に帰還し、記者会見で「帰還する時、宇宙から見たら、なぜか地球は赤かった」と発言する場合は、「地球は赤かった」は知識ではなく、この宇宙飛行士のかなり個人的な体験を表現している^{*2}。この場合、

^{*2} 論をかんたんにするため、ここでは「この宇宙飛行士はぞんざいな性格か何かの理由で、記者会見において丁寧体ではなく普通体の日本語で発言する」という設定にしてある。この設定の非現実性は、論の当否に影響しないと筆者は考えている。

情報の共有可能性は限定されている。たしかに、宇宙飛行士本人は「いや、あれは自分の記憶違いで、やっぱり地球は青かった」と自分の発言を撤回できる。また、同行した別の宇宙飛行士（つまり共同体験者）も「そうだ。あの時たしかに、地球はなぜか赤かった」「何を寝ぼけているのだ。あの時、地球は青かったではないか」など、「地球は赤かった」発言を支持したり批判したりできる。だが、その時点に宇宙から地球を見ていない者は「地球が赤かったかどうか」を問題にできない。

いまの宇宙飛行士の例には、体験者（宇宙飛行士）と情報を共有可能な他者（同行の宇宙飛行士）が存在している。だが、他者は一人も情報を共有できず、体験者本人が専有するだけという極端な例もある。たとえば、宇宙ステーションで催眠術師に「いまから私が3つ数えると、皆さんは窓の外の地球や月が、ふだんと違う色に見えます。どういう色になるかは人によって違います。1、2、3」と術をかけられた者の1人が、後になってその時の体験を振り返り、「気が付くと窓の外の月は緑だった。地球は赤かった」のように述懐するという場合である。この例では、「地球や月がどういう色に見えるかは、人によって違う」という前提の上で、外界の事物のあり方（地球や月の本来の色）にしばられない、純粹に個人的な体験（地球や月の見え方）が述懐されている。そのため、「地球が赤かったかどうか」を問題にすることは、本人には可能だが（「あれは自分の記憶違いで、地球も緑だったのではないか」など）、他者にはできない。

以上で取り上げた3つの例（太古の地球・宇宙飛行士・催眠術）からわかるように、情報の共有可能性は程度問題であって、有る／無いという2項的把握よりも、高い～低いという連続的把握になじむ。この第2節の冒頭で、「共有可能性の程度に応じて、知識と体験に連続的ながら二分」と述べたのは、このような理由に基づく。

知識と体験について以上で述べたことは、日常用語の「知識」「体験」からすればさほど意外ではないかもしれない。だが、注意が必要な点もある。

第1点。日常用語の「知識」とちがって、本稿の知識は、情報の共有可能性という尺度だけで定義されている概念である。たとえば「犯人は男にちがいない」「犯人は男だろう」「犯人は男かもしれない」のような情報は、確信度が低く、日常用語で言う「知識」とするにはあやふやすぎるかもしれないが、本稿ではこれも「犯人は男だ」のような確信度の高い情報と同様、知識とする。本

稿の「知識 vs. 体験」という対立は情報の確信度を問わない。

第2点。日常用語の「体験」は日常用語の「経験」と意味がよく似ているが³、本稿では体験と経験は区別される。第1節でイメージスキーマを経験の鋳型と述べたように、本稿で言う「経験」とは、心身に記憶され、たくわえられるものを指す。したがって、仮に一言も発しない人間についても、経験を論じることとはできる。これに対して、本稿で言う「体験」とは言語情報の1タイプである。したがって、一言も発しない人間の体験を論じることとはできない。心内にたくわえられる情報が、言語表現の形を必ずしもとっていない以上⁴、このような区別は議論を混乱させないために必要だろう。

第3点。本稿の「知識 vs. 体験」という対立は、「客観 vs. 主観」という対立とは同一視できない。たとえば、客観的には同一の事態が立場によって「その人が私に本をくださった」「その男が女に本をやってしまった」のように表現し分けられることは珍しくない。文「その人が私に本をくださった」の話し手は、本の与え手に（表面的であるにせよ）敬意を抱く、本の受け取り手にかぎられており、他方、文「その男が女に本をやってしまった」の話し手は、本の与え手や受け取り手に敬意を抱かず、本の所有権移転を悪く評価する第3者にかぎられている。したがって、「情報の共有可能性」の内容次第では、情報「その人が私に本をくださった」や情報「あの男がその女に本をやってしまった」は、共有可能性が低く、体験だとなりかねない。だが、本稿では「情報の共有可能性」をせまく定義し、これらの情報は知識であって体験ではないとする。

ひとくちに主観性(subjectivity)といってもその内容は研究者によってさまざまである。たとえば岩崎は主観性という概念を、直示論的な主観性・評価的な

*3 但し、日常用語「経験」と日常用語「体験」が、まったく同義というわけではない。たとえば「戦争の経験」は個人にかぎらず団体や国家も持つことができるが、「戦争の体験」を持てるのは個人だけである。団体や国家は身体がないので「戦争の体験」は持てない。このように「体験」は「経験」とちがって身体性と強く結びついている。もちろんいま定義を問題にしているのは専門用語としての「経験」「体験」だが、「体験」というネーミングは、専門用語と日常用語が連続しがちであることを意識してのものである。

*4 心内にたくわえられている経験の少なくとも一部はアナログ的な形でたくわえられており、命題構造のような形でたくわえられてはいない (Chafe (1977:50))。

主観性・認識論的な主観性の3つに分ける (Iwasaki (1993:第1章))。直示論的な主観性とは直示中心の選択に関する主観性で、上の例なら「その人」「私」「あの男」「その女」という表現に関わる。評価的な主観性とはさまざまな事物に評価を下す際の基準の主観性で、上の例なら「くださった」「やってしまった」という表現に関わる。認識論的な主観性とは、情報の確信度が個人個人で異なるという、上の第1点で述べた主観性である。「情報の共有可能性」はこれら3種の主観性とは直接関わらない。また、ラネカー (たとえば Langacker (1997)) によれば、主観性とは、認知者が表現対象からはずれる度合いだが、「情報の共有可能性」はこの意味の主観性とも一致しない。たしかに、本稿が扱う表現の中には、この意味で主観性が高いものもあるが (具体的には「情意表出の文」)、そうでないものもあるからである (たとえば上述の催眠術の例「地球は赤かった」は、「田中さんは地球は黒かったらしいけど、私は地球は赤かった」のように、必要に応じて認知者 (田中さん・私) を表現できる)。

3. 知識と体験を分ける利点

第2節では、知識と体験という言語情報の区別を導入した。この第3節では、この区別が恣意的なものではなく、現代日本語 (東京方言) の話者がおこなっている区別と一致することを示す。具体的に取り上げるのは、主文末の「た」の使用条件である⁵。

たとえば、殺人事件の目撃者は捜査員に「犯人は右手の指が一本ありません」と証言してもよいが、「犯人は右手の指が一本ありませんでした」と、「た」を使って証言することもできる。だが、仮に目撃者が「犯人は右手の指が一本ありませんでした」と証言したからといって、それを聞いた捜査員がそのまま上司に「デカ長、犯人は右手の指が一本ありませんでした」などと報告すること

*5 この節で取り上げる「た」については従来、過去を表すとする説 (井上 (2001)・金水 (2001))、話し手の態度を表すとする説 (森田 (1995)) の対立があった。だが、過去説の優位性を示すさまざまな証拠が指摘されているので (定延 (2001b, 2002a))、本稿では問題の「た」が過去を表すという前提で論を進め、態度説についての言及は最小限にとどめる。

は、あまり自然ではない*。 「た」を使わず「デカ長、犯人は右手の指が一本ありません」と報告することの方が、はるかに自然である。このように、「た」を使用できる話し手は無制限ではない。

ところが、上のような話し手の制限が、働かない場合もある。たとえば、死体を調べた検死官は上司に、「死体には目立った外傷はありません」と報告してもよいが、「死体には目立った外傷はありませんでした」と、「た」を使って報告することもできる。そして、検死官から（「死体には目立った外傷はありません」であれ「死体には目立った外傷はありませんでした」であれ）報告を受けた上司は記者会見で、「た」を使わずに「死体には目立った外傷はありません」と述べてもよいが、それだけではなく、「た」を使って「死体には目立った外傷はありませんでした」と述べてもよい。

では、「た」の使用に関して、聞き込み捜査員と検死官上司で、なぜこのような違いが生じるのだろうか？ 聞き込み捜査員と検死官上司で、態度に大きな差があるとは思われない。したがって、問題の「た」が話し手の何らかの態度（たとえば「発見」）を表すと考えるかぎり、満足 of いく説明は与えられそうにない。問題の「た」が態度ではなく、過去を表すという前提に立って、聞き込み捜査員と検死官上司の違いを説明するには、知識と体験という情報の区別を認める必要がある。その場合、説明は次のようになる。

そもそも「た」が表す過去概念は、言語情報が知識か体験かによって異なる。たとえば「現在は青いが、太古の昔は地球は赤かった」のように、知識の表現に使われる主文末の「た」は、命題（[地球は青い]）の成立時点が過去（太古）であることを表す。他方、たとえば催眠術にかかった体験を後になって述懐する「地球は赤かった」のように、体験の表現に使われる主文末の「た」は、命題（[地球は赤い]）の成立時点ではなく、命題情報（[地球は赤い]）という情報を得る体験の時点（催眠術にかかった状態で地球を見た時点）が過去であることを表す。いま問題になっている聞き込み捜査員と検死官上司の場合も同様である。まず聞き込み捜査員について述べると、目撃者の証言「犯人は右手

*6 聞き込みをする前に捜査員と上司が「ひょっとして、犯人は右手の指が欠けているんじゃないでしょうか」「いやあ、どうかなあ」など、事前に犯人の身体状況について思案したり、議論したりしていれば別である。このことは第 6.1.2 節で後述し、ここでは触れない。

の指が一本ありませんでした」は、知識の表現ではなく、目撃者の体験の表現である。先に述べたように、体験とは個人的なものであって、他者の体験は自己の体験と同じではない。目撃者の体験は聞き込み捜査員の体験と同一視できない。聞き込み捜査員は目撃者の体験を、自分の体験のように語ることはできない。したがって、聞き込み捜査員が「た」を使って上司に「犯人は右手の指が一本ありませんでした」と報告することは不自然である。聞き込み捜査員は「た」を使わず「犯人は右手の指が一本ありません」と、聞き込みを通して得られた知識の表現をおこなうことしかできない。

次に検死官上司について述べる。もちろん検死官上司の場合も、他者（検死官）の体験は自己（検死官上司）の体験と同じではない。だが、いま問題になっている他者（検死官）は自己（検死官上司）の部下であり、検死に関する自己の代行者と言える⁷。そこで、記者会見という外部への発表の場では、検死官上司は「死体には目立った外傷はありません」と、検死官の体験表現から得られた知識を表現することももちろん可能だが、検死に関する部下の体験を自己の体験と同一視して表現することもできる。それが「死体には目立った外傷はありませんでした」であり、末尾の「た」は体験時が過去であることを表す。

以上のように言語情報が知識か体験かによって「た」が表す過去概念が違うなら、知識と体験は、現代日本語の話者に表現し分けられ、区別されているということになる。

4. 知識か体験か？

上で見たように、話し手（たとえば殺人事件の目撃者）は1つの事態（犯人の右手指の欠損）を、知識として表現したり（「犯人は右手の指が一本ありません」）、体験として表現したりする（「犯人は右手の指が一本ありませんでした」）。では、話し手が知識表現を選ぶか、それとも体験表現を選ぶかは、どのように決まるのだろうか？

*7 本稿で言う代行者とは、自己の延長物としてとらえられた他者を指す。たとえば、歯医者に歯を治してもらうことを「歯医者に歯を治してもらう」と言わず「歯を治す」と言うのは、歯医者进行代行者化した表現である。建築業者に家を建ててもらうことを「家を建てる」と言うのは建築業者进行代行者化した表現である。本文で述べている検死官上司の例では、検死官上司は「検死をおこなった」と言える。

話し手が心内でいかに表現を選択するかという問題に対して、全面的な解答を与えることは本稿の射程を大きく超えているが、「知識表現か体験表現か」という選択に影響を与える要因として、本稿では「文脈」「認知者と環境とのインタラクション」の2つを提出したい。

まず、文脈について。話し手が淡々と効率よく知識を伝えるか、それとも思い入れたっぷりに体験談を語るかは、そもそも話し手がどういう文脈の中で誰に対して何をなそうとしているかに影響される。たとえば上述のとおり、殺人事件の目撃者が聞き込み捜査員に証言するという文脈では、知識表現も（「犯人は右手の指が一本ありません」）、体験表現も（「犯人は右手の指が一本ありませんでした」）、ともに可能である。そして、知識表現か体験表現かの選択は、捜査員が目撃者に「昨夜あなたが見たことを順に聞かせてください」などと体験談を催促したのか、「犯人の特徴を聞かせてください」などと知識をあからさまに要求したのかという直前の文脈によって影響を受ける。

但し、「知識表現か体験表現か」という選択は、このような文脈だけで常に完全に決まるわけではない。そして、この第2の要因として本稿が提出するのが、認知者と環境とのインタラクションである。この提案をくわしく述べるために、必要な諸概念を次の第5節で導入する。

5. 探索と体感

まず、認知者と環境とのインタラクションを、認知者から環境への働きかけと、環境から認知者への働きかけの2面に分けておく（図4）。

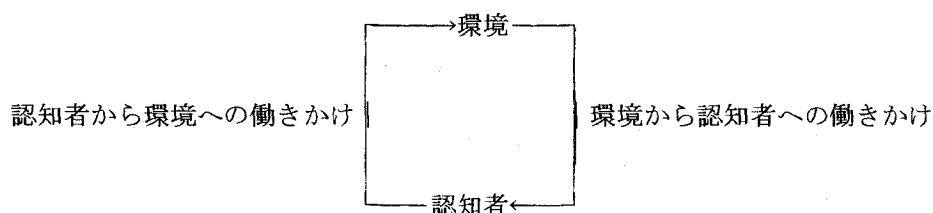


図4：認知者と環境とのインタラクション

本稿冒頭で挙げたインタラクション「一郎が少し前に動けば、前方のモノがそれまでより大きく見える」を例にとれば、「一郎が少し前に動く」というのが認知者から環境への働きかけの部分に相当し、「前方のモノがそれまでより大

きく見える」というのが環境から認知者への働きかけの部分に相当する*8。

5. 1. 探索

本稿で言う探索とは、「未知の環境（たとえば見知らぬ街）がどんな様子なのか認知者が調べる。すると、環境からそれなりの情報が認知者に返ってくる」という、認知者と環境とのインタラクションである*9。探索が及ぶ領域（見知らぬ街）を探索領域と呼ぶ。探索には「探索領域はどんな様子なのか？」という問題意識が必要である。この問題意識を探索意識と呼ぶ。環境にのぞむ認知者の意気込みと言ってもよい。見知らぬ街を見ている、ただぼんやりと眺めており、探索意識がないのであれば、探索をおこなっているとは言えない。

探索というインタラクションは、認知者から環境への働きかけの部分「未知の環境（見知らぬ街）がどんな様子なのか認知者が調べる」と、環境から認知者への働きかけの部分「環境からそれなりの情報が認知者に返ってくる」とから成り立っている。探索意識が必須であることからわかるように、探索は、認知者から環境への働きかけの部分に焦点があるインタラクションである。

或る部屋を探索領域とする探索の場合、ただ「その部屋はどんな様子なのか？」という探索意識だけで探索する場合もあるが、たとえば「なくした手帳はどこか？」のような、別の課題を解決するために探索する場合もある。このような、探索によって解決しようとする課題を探索課題と呼ぶ。探索課題と探索意識は似ているが別物である。探索課題は探索に必須ではないが、探索意識は探索に必須で、探索意識がなければ探索にはならないからである。両者は、

*8 インタラクションを、認知者から環境への働きかけの面と、環境から認知者への働きかけの面に2分するのは、説明をわかりやすくするための便宜的なものにすぎないということを断っておく。実際には、認知者から環境への働きかけと、環境から認知者への働きかけは、同時に、分離できない形で生じる。

*9 探索と言語現象の関わりについては、さらに定延(1999, 2000, 2001a, 2002a, 2002b, 近刊b)を参照。

探索課題が課せられるほど探索意識が活性化するという関係にある^{*10}。

探索は、その時間的スケールに応じて、マクロ探索とミクロ探索に区分される。たとえば、或る部屋を探索領域とするマクロ探索とは、認知者がその部屋に入った時点に始まり、その部屋を退出した時点に終了する一つの大きな探索である^{*11}。但し、「なくした手帳はどこか？」のように探索課題を備えた探索の場合は、探索領域（部屋）の中で探索課題が解決すれば（手帳が発見されれば）、その時点が終期となる。このようにスケールの大きなマクロ探索とは別に、探索領域である部屋の中で一瞬一瞬連続しておこなわれる、スケールの小さな探索がある。それがミクロ探索である。いまおこなうミクロ探索は次の瞬間にはもう終わり、過去のものとなっている。これに対してマクロ探索は、認知者が探索課題を解決するか、探索領域を退出するかしてはじめて終了する。

5. 2. 体感

体感とは、「環境に認知者が身を置く（あるいは何かをする）。すると、環境から強烈な情報が返ってくる」という、認知者と環境とのインタラクションである。

このインタラクションは、認知者から環境への働きかけの部分「環境に認知者が身を置く（あるいは何かをする）」と、環境から認知者への働きかけの部分「環境から強烈な情報が認知者に返ってくる」とから成り立っている。認知

*10 このような用語をわざわざ導入するのは、表現のあいまいさから生じる混乱を避けるためである。たとえば「部屋を探索する」という表現は、部屋がどんな様子かと部屋の内部を見てまわることも意味しそうだし、目的の部屋を探し求めて建物（巨大なホテルなど）の内部をうろつくことも意味しそうである。このように「～を探索する」という表現はあいまいである。「探索の対象」という表現にも同様のあいまいさがあり得るだろう。「～を探索する」「探索の対象」のような表現の代わりに、探索領域・探索課題という用語を使えば、これら2つの意味は表し分けることができる。部屋がどんな様子かと部屋の内部を見てまわるのは、部屋を探索領域とする探索である。目的の部屋を探し求めて建物内をうろつくのは、「目的の部屋はどこか？」という探索課題をともない、建物を探索領域とする探索である。

*11 説明を簡単にするために、探索者は部屋の中で休憩せず、探索意識はとぎれないとしておく。以下も同様である。

者は環境に何か積極的に働きかけてもよいが、特に積極的には働きかけず、ただその環境に身を置くだけでもよいように、認知者から環境への働きかけの部分には焦点はない。むしろ、環境から認知者への働きかけが、強烈な情報でなければならないという点において、体感環境から認知者への働きかけに焦点があるインタラクションと言える。つまり探索と同様、体感も認知者と環境とのインタラクションの一種だが、焦点の置かれる位置が異なる。環境から認知者が受け取る情報の強烈さを、体感度と呼ぶ。

5. 3. インタラクションと体験

すでに述べてきたように、認知者と環境とのインタラクションには、認知者から環境への働きかけの部分と、環境から認知者への働きかけの部分がある。当該インタラクションに探索課題（環境にのぞむ認知者の意気込み）が明確に設定されるほど、認知者から環境への働きかけの部分は活性化する。ひいては、そのインタラクション（探索）全体が認知者にとって圧倒的なものになる。話し手が知識の表現を選択せず、当該インタラクション（探索）を中核とする認知体験の表現を選択することも、それだけ動機づけられる。

また、当該インタラクションの体感度が高いほど、環境から認知者への働きかけが活性化する。ひいては、そのインタラクション（体感）全体が認知者にとって圧倒的なものとなる。話し手が知識の表現を選択せず、当該インタラクション（体感）を中核とする認知体験の表現を選択することも、それだけ動機づけられる。

「認知者と環境とのインタラクションは、知識表現か体験表現かという選択に影響を及ぼし得る」という本稿の提案の内容は、以上である。次の第6節では、この提案を妥当と考える根拠として、若干の観察を挙げる。

6. 観察

この節では、従来、まったく無関係なものとして別々に記述されてきた言語表現どうしが、実はいくつかの共通点を持っているということを現代日本語について指摘する。さらに、それらの言語表現がなぜそのような共通点を持つのかを説明するには、上記の提案を採り入れて、インタラクションが言語表現に与える影響を認めることが効果的だということを示す。第6.1節でとりあげるのは、探索を中核とする認知体験の表現である。次の第6.2節でとりあげるの

は、体感の中核とする認知体験の表現である。

6. 1. 探索を中核とする認知体験の表現

ここでとりあげる言語表現は、「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「変則的に見える助詞『で』」「発見を表すかに見える助詞『た』」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」の4つである。これらの言語表現は従来、別々に記述されてきており、共通性が言及されることはなかった。が、これらに関する最近の研究（定延(1999, 2000, 2001a, 2001b, 2002a, 2002b, 近刊, 準備中)）から、3つの共通点が浮かび上がってくる。

6. 1. 1. 知悉（ちしつ）度

第1の共通点は、これらの表現は、話し手が対象を知悉（ちしつ）している（つまり知り尽くしている）という状態に近いほど、不自然になるということである。（ここでは話し手が対象を知っている度合いを「知悉度」と仮に呼んでおく。） まず、「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」についてこのことを示す。ここで「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」と呼ぶのは、たとえば次の文(1a)の「しょっちゅう」のような言語表現である。

- (1) a. 「或る街を初めて訪れ、観光バスの中から車窓風景を眺めて感想を漏らす」 なんか、しょっちゅうレストランがあるね。

文(1a)の話し手が言いたいのは、その街にレストランがたくさん存在することである。この時、頻度語彙「しょっちゅう」は、その街という空間におけるレストランの分布を表すかに見える。ここで、文(1b)を見てみよう。

- (1) b. ?うちの近所にはしょっちゅうレストランがあるよ。

この文(1b)の話し手が言いたいのは、話し手の住居の近所にレストランがたくさん存在することだとする。この場合、頻度語彙「しょっちゅう」は、文(1a)の場合と同様に、空間におけるレストランの分布を表すかに見える。だが、文(1b)は文(1a)ほど自然ではない。つまり、通常「話し手は問題の領域（街）を熟知していない」と想定される文(1a)は自然だが、通常「話し手は問題の領

域（近所界限）を熟知している」と想定される文(1b)はあまり自然ではない^{*12}。

次に、「変則的に見える『で』」について同様のことを示す。たとえば文「庭に木がある」は自然だが文「??庭で木がある」は不自然であるように、現代日本語ではモノの所在は「に」で表現され、「で」では表現されない。また、たとえば文「庭でパーティがある」は自然だが、文「??庭にパーティがある」は不自然であるように、現代日本語ではデキゴトの所在は「で」で表現され、「に」では表現されない。以上のことは古くからよく知られている（たとえば Alfonso (1980:212)を参照）。ところが、この伝統的な記述が成り立たないかに見える場合がある。たとえば次の文(2a)を見られたい。

- (2) a. 「「こんな品物は日本にしかないでしょうね」と言われて、北京帰りの人間が」 北京でありましたよ。

文(2a)の話し手は、話題になっている品物の北京における存在を表現しているように見える。モノの所在は、一般的記述によれば「に」で表現され、「で」では表現されないはずだが、文(2a)は、モノの所在を「で」で表現しているように見えるにもかかわらず、自然である。ここで文(2a)と比べたいのが次の文(2b)である。

- (2) b. 「「こんな品物は日本にしかないでしょうね」と言われて、北京人が」 ?北京でありましたよ。

文(2b)の話し手は、流ちょうに日本語を話す、北京生まれ、北京育ちの北京人であるとする。文(2a)と文(2b)は、話し手しか違わないが、この違いは文の自然さに反映される。通常「話し手は北京の街をあまり知らない」と想定される文(2a)は完全に自然であり、通常「話し手は北京の街を熟知している」と想定される文(2b)は、文(2a)に比べて自然さが低い。

さらに、「発見を表すかに見える『た』」について同じことを示す。「発見を表すかに見える『た』」とは、たとえば「あ、あった」と言う場合の「た」である。この「た」も第3節で取り上げた「た」と基本的に同じで、過去を表す

*12 散歩が話題になっている文脈では、文(1b)の自然さは高いこともある。だがこれは、散歩という行為が、かなり熟知した近所界限であってもあらためて未知の探索領域とする探索であることからすれば不思議はない。

が^{*13}、ここでは表面的印象にしたがい「発見を表すかに見える『た』」と呼んでおく。たとえば次の文(3a)には、「発見を表すかに見える『た』」が現れている。

- (3) a. [友人と山中をハイキングしていたところ、すぐ目の前のがけの上に、思いがけずサルを発見した。がけの上のサルを指さしながら友人に向かって] ほら、あんなところにサルがいたよ。

[あんなところにサルがいる] というデキゴトは文(3a)の発話時現在に成り立っている。にもかかわらず、文(3a)では「た」が使われている。このことからすれば、文(3a)の「た」は、過去を表さず、「発見」という話し手の態度を表すかに見える。この「た」が、「発見を表すかに見える『た』」である。ところが、文(3b)を見てみよう。

- (3) b. [自宅の縁側に立って庭をふと見たところ、思いがけずそこにサルを発見した。庭のサルを指さしながら、サルに気づいていない家族に向かって] ?ほら、あんなところにサルがいたよ。

文(3b)と文(3a)は発話の文言は同じだが、文(3b)は文(3a)と比べて不自然である。つまり、通常「話し手は問題の対象(山中)をよく知らない」と想定される文(3a)は自然だが、通常「話し手は問題の対象(自宅の庭)をよく知っている」と想定される文(3b)は唐突すぎて、あまり自然ではない。

最後に、「いわゆるとりたて詞『ばかり』」についても同様のことを示す。たとえば、次の「ばかり」の文(4a)は自然だが、文(4b)は不自然である。

- (4) a. [洋服屋で、店員Aが店員Bに、客の挙動について話す]
あの客は見ているばかりで、ちっとも買わないねえ。
b. [店員に「よろしければご試着ください」と言われて客が答える]
?いえ、見ているばかりですから。

文(4a)と文(4b)のこの違いは、「他者の挙動は基本的にわからないものだが、自己の挙動はよくわかっている(つもりになっている)ものである」という違いに対応する。よくわからない他者の挙動を表現する「ばかり」の文(4a)は自然であり、よくわかっている自己の挙動を表現する「ばかり」の文(4b)は不自然

*13 この「た」も注5の「た」と同様、過去説(井上(2001)・金水(2001))と態度説(森田(1995))の対立があるが、やはり過去説の優位性が論じられている(定延(2001b,2002a))。

然である。

以上では、「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「変則的に見える『で』」「発見を表すかに見える『た』」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」という4つの言語表現が、「話し手が対象をよく知っているほど不自然になる」という共通点を持つことを具体的に示した。では、これらの言語表現はこの共通点をなぜ持つのだろうか？ この問題に答えるには、「これらの言語表現は、探索というインタラクションを中核とする認知体験を表す」と考えることが有効である。

この考えによれば、たとえば文「この街にはしょっちゅうレストランがある」が表しているのは、探索領域（この街）をさぐるマクロ探索の中で、情報「レストランがある」を得るミクロ探索が、「しょっちゅう」という頻度で生じるという認知体験である。また、文「それは北京でありましたよ」が表しているのは、探索領域（北京）をさぐるマクロ探索の中で、情報「それがある」を得るミクロ探索があったという認知体験である。同様に、文「ほら、あんなところにサルがいたよ」が表しているのは、探索領域（たとえば山中）をさぐるマクロ探索の中で、情報「あんなところにサルがいる」を得るミクロ探索がたった今あったという認知体験である^{*14}。さらに、文「見ているばかりだ」が表しているのは、「どういう行動をおこなうか」という探索課題のもとに、探索領域（話題の人物の様子）をさぐるマクロ探索の中で、情報「見ている」を得るミクロ探索ばかりがおこなわれるという認知体験である。

このように考えれば、探索とは未知領域を探索領域とするものであるから、探索領域の知悉度が高いほど探索は不自然であるとして、上の問題はかんたんに答えることができる。

6. 1. 2. 存在とアリサマ

「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「変則的に見える『で』」「発見を表すかに見える『た』」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」の第2の共通点は、これらの表現は、モノのアリサマを表す場合、モノの存在を表す場合ほど自然でない、ということである。

*14 ミクロ探索が一瞬のものであって、表現する時点ではすでに過去のものとなっていることに注意されたい。

まず、「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」についてこれを示す。たとえば次の文(5a)と文(5b)を比較されたい。

(5) a. この山はときどき大きなサルがいますよ。

b. ?この山のサルはときどき大きいですよ。

文(5a,b)の話し手が言いたいのは、この山に生息するサルのうち、一部のサルが大きいということだとする。この時、頻度語彙「ときどき」は、この山という空間における大きいサルの分布を表すかに見えるから、空間的分布を表すかに見える頻度語彙である。だが、文(5a)と比べて文(5b)は不自然である。つまり、空間的分布を表すかに見える頻度語彙「ときどき」は、モノ(大きいサル)の存在を表す場合(文(5a))は自然だが、モノ(サル)のアリサマ(大きい)を表す場合(文(5b))は自然さが低い。

「変則的に見える『で』」についても同様である。たとえば次の文(6a,b)を見られたい。

(6) a. 「こんな品物は日本にしかないでしょうね」と言われて、北京帰りの人間が] 北京でありましたよ。=(2a)

b. 「赤いのは日本にしかないでしょうね」と言われて、北京帰りの人間が] ?北京で赤かったですよ。

文(6a)は先に挙げた文(2a)と同じものであり、話題になっている品物の北京における存在を表現しているかに見える。これに対して文(6b)は、文(6a)に比べて自然さは低い^{*15}。つまり、モノ(話題になっている品物)のアリサマ(赤い)を表す場合(文(6b))は、モノ(話題になっている品物)の存在を表す場合(文(6a))ほど自然でない。

「発見を表すかに見える『た』」についても同じことが言える。たとえば次の文(7a)と文(7b)を見られたい。

(7) a. [友人と山中をハイキングしていたところ、すぐ目の前のがけの上に、思いがけずサルを発見した。がけの上のサルを指さしながら友人に向かって] ほら、あんなところにサルがいたよ。=(3a)

b. ?[目の前に巨大なサルを発見して] 大きかったな～。

文(7a)は先の文(3a)と同じものであり、目の前のサルの存在を表すかに見える。

*15 「北京でも赤かったですよ」「北京では赤かったですよ」のように「も」「は」を入れれば文の自然さは高くなるが、このことについてはここではくわしく論じない。

同様に文(7b)は、目の前のサルが大きいことを表すかに見える。したがって文(7a,b)の「た」は過去を表さず、「発見」という話し手の態度を表すかに見える。ここで注目したいのは、文(7a)に比べて文(7b)が不自然だということである。事前に「この山のサルは大きいだろうか、それとも小さいだろうか」と、他人と議論したり自分で思いをめぐらしたりしていたなら、文(7b)は必ずしも不自然ではないが（このことも後で説明する）、こうした事前の思いまどいがないければ文(7b)は不自然である。対して、文(7a)は「この山にサルはいるだろうか、それともいないだろうか」という事前の思いまどいがなくとも自然である。「大きいな～」なら問題なく自然なので、文(7b)の不自然さは「た」の問題である^{*6}。

「いわゆるとりたて詞『ばかり』」も同様である。たとえば次の文(8a,b)を見られたい。

- (8) a. 赤いボールばかりだ。
b. ?赤いばかりだ。

文(8a)は、赤いボールというモノの存在を表しているかに見える。文(8b)は、話題になっているモノについて、赤いというアリサマを表しているかに見える。そして、文(8a)は自然だが、文(8b)は不自然である。

以上では、「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「変則的に見える『で』」「発見を表すかに見える『た』」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」という4つの言語表現が、「モノのアリサマを表す場合、モノの存在を表す場合ほど自然でない」という共通点を持つことを具体的に示した。なぜこれら4つの言語表現が、このような共通点を持つのか、という問題に答えるには、やはり「これらの言語表現は、探索というインタラクションを中核とする認知体験を表す」と考えることが有効である。

この考えによれば、いま問題にしている4つの言語表現はすべて、すでに第6.1.1節で述べたように、ミクロ探索を中核とする認知体験である。ここで重要なのは、存在情報が、あらゆる情報の中で基本的な地位を占めているということである。われわれは、(現実世界にであれ、夢の世界にであれ)存在しないサルについて、その大きさを語ることはできない。モノの存在情報（[サル

*16 「あんなところにサルが集まっていたよ」等はここでの存在文に準じる。この点、金水(2001)が指摘するとおりである。

がいる]) は、モノ (サル) の情報のうち最も基本的な情報であり、アリサマ情報 ([サルが大きい] [サルがかわいい] 他) はすべて存在情報 ([サルがいる]) を前提にしている。一瞬でおこなわれるマイクロ探索において、存在情報はアリサマ情報よりも獲得されやすいと考えても不自然ではないだろう。したがって、マイクロ探索を中核とする認知体験を表す上記4つの言語表現は、存在以外のアリサマ情報の場合は、存在情報の場合ほど自然ではない。

上記の言語表現がマイクロ探索を中核とする認知体験を表すという考えは、「発見を表すかに見える『た』」に対する事前の思いまどい効果を説明する上でも有益である。事前の思いまどい効果とは、たとえば、通常不自然である文(7b)「?? [目の前に巨大なサルを発見して] 大きかったな～」が、事前に「この山のサルは大きいだろうか、それとも小さいだろうか」と思いまどっていたなら自然になるというものである。このような事前の思いまどいとは、探索課題の設定や強化にほかならない。もともとマイクロ探索では獲得しにくいアリサマ情報 ([(サルが) 大きい]) が、探索課題 ([この山のサルは大きいか、それとも小さいか]) の設定・強化によって獲得しやすくなるのは、当然のことだろう。

6. 1. 3. 一瞥しやすさ

第3の共通点は、複数個の事物を表す言語表現だけが持つ共通点である。つまり「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」の2つだけに共通するもので、「変則的に見える『で』」「発見を表すかに見える『た』」は関係しない。この共通点は、探索領域の全域が1回のマイクロ探索でカバーできるかどうか (本稿ではこれを仮に「一瞥しやすさ」と呼ぶ) が文の自然さに影響するということである。

まず、「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」について、一瞥しやすさが文の自然さに影響することを示す。たとえば次の文(9a,b)を見られたい。

- (9) a. [一周するのに何時間もかかる広いテーマパークのところどころに
きれいな時計が置かれているのを見て] ときどき時計があるね。
b. [一瞥できるせまい私室の窓際やベッドの上など、ところどころに
きれいな時計が置かれているのを見て] ??ときどき時計があるね。

文(9a,b)の頻度語彙「ときどき」は、テーマパークや私室という空間における時計の分布を表すかに見えるから、空間的分布を表すかに見える頻度語彙である。だが、文(9a)と比べて文(9b)は不自然である。つまり、空間的分布を表す

かに見える頻度語彙「ときどき」は、一瞥できない空間（テーマパーク）におけるモノの分布を表すかに見える場合（文(9a)）は自然だが、一瞥できる空間（せまい私室）におけるモノの分布を表すかに見える場合（文(9b)）は自然さが低い。

次に、「いわゆるとりたて詞『ばかり』」についても、一瞥しやすさが文の自然さに影響することを示す。たとえば次の文(10a,b)を見られたい。

(10) a. [0度に設定されているはずの保冷室が本当に0度かどうか確かめるため、1時間おきにおこなった保冷室の室温測定の結果（「午前0時は0度」「午前1時は0度」「午前2時は0度」……）を見て] 0度ばかりだなあ。

b. [0度に設定されているはずの保冷室が本当に0度かどうか確かめるため、備え付けられている温度計を24時間、よそ見もせずに眺め続けた後で] ??0度ばかりだなあ。

文(10a,b)は文言「0度ばかりだなあ」は同じだが、文(10a)は自然、文(10b)は不自然である。この違いは「0度ばかりだなあ」の発話状況の違いから生じる。24時間にわたる保冷室の室温測定は、文(10a)の場合は複数回に分けておこなわれているが、文(10b)の場合は（24時間という長さではあるが）1回でおこなわれている。24時間の室温を「一瞥」したのは文(10b)の場合であって、文(10a)の場合ではない。

ここでは、「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」という2つの言語表現が、「一瞥しやすいほど不自然」という共通点を持つことを具体的に示した。これらの言語表現が、このような共通点を持つことを説明するには、やはり「これらの言語表現は、探索というインタラクションを中核とする認知体験を表す」と考えることが有効である。

そもそも「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」という2つの言語表現は、複数個の事物の実現パターンを表す。この「複数個の事物」が、モノ（時計や、0度という保冷室の室温）ではなく、探索を中核とする認知体験であると考えれば、文(9)(10)には説明がつく。探索領域が一瞥できてしまえば、探索も、そして認知体験も1つしか生じないので、複数回の認知体験を表す「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」は不自然になる。

6. 2. 体感を中核とする認知体験の表現

探索も体感も、認知者と環境とのインタラクションの一種であることに変わりはない。だが、体感を中核とする認知体験の表現は、探索を中核とする認知体験の表現とは部分的に異なっている。ここでは、「度数表現+アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」「情意表出表現」の4つをとりあげる。これらの言語表現に関する最近の研究(定延(近刊))をふまえると、2つの共通点が浮かび上がってくる。

6. 2. 1. 刺激の程度

第1の共通点は、これらの表現は、刺激の程度が強いことを好むということである。まず、「度数表現+アリサマ表現」についてこのことを示す。ここで「度数表現」と呼ぶのは頻度表現と回数表現であり、「度数表現+アリサマ表現」とは、たとえば次の(11a,b)の「ときどきすごく熱い」「3回ぐらいすごい熱かった」のような言語表現を指す。

- (11) a. [浴室でシャワーを浴びながら、外にいる人間に叫ぶ]

お〜い、シャワーがさ〜、さっきからときどきすごく熱いんだけど〜、湯沸かしかなんか、こわれてない〜?

- b. [(a)の状況後、浴室から出てきて感想を言う]

だからシャワーがさ〜、3回ぐらいすごい熱かったわけ。

従来、「度数表現+アリサマ表現」は不自然と考えられてきたが^{*17}、実際には文(11a,b)のように、自然さが高いものもあるということを、まず指摘しておきたい。その上で注目したいのは、刺激の程度である。文(11a,b)の「すごく熱い」「すごく熱かった」の部分では、シャワーが熱湯であるという、強い刺激が表現されている。この刺激を弱めると、文(11c,d)のように自然さが落ちる。

- (11) c. [浴室でシャワーを浴びながら、外にいる人間に叫ぶ]

?お〜い、シャワーがさ〜、さっきからときどきあったかいんだけど〜、湯沸かしかなんか、こわれてない〜?

- d. [(a)の状況後、浴室から出てきて感想を言う]

*17 たとえば星野(1994:68)は、「ときどき」は名詞文や形容詞文には使えず、使用は動詞文にかぎられると述べている。

?だからシャワーがさ～、3回ぐらいあったかかったわけ。

文(11c,d)の不自然さは、「シャワーがあたたかいということは当たり前で、わざわざ表現する価値はないから」という形では説明できない。というのは、[表現者は冷水シャワーを浴びるつもりであった]という、シャワーがあたたかいことがもはや当たり前でない状況においても文(11c,d)は完全には自然ではなく、動詞述語文(11e,f)と比べて微妙ながら自然さが低いからである。

(11) e. [浴室でシャワーを浴びながら、外にいる人間に叫ぶ]

お～い、シャワーがさ～、さっきからときどきあったかくなるんだけど～、湯沸かしかなんか、こわれてない～?

f. [(a)の状況後、浴室から出てきて感想を言う]

だからシャワーがさ～、3回ぐらいあったかくなかったわけ。

これに対して文(11a,b)は、動詞述語文(11g,h)と比べても自然さに遜色がない。

(11) g. [浴室でシャワーを浴びながら、外にいる人間に叫ぶ]

お～い、シャワーがさ～、さっきからときどきすごく熱くなるんだけど～、湯沸かしかなんか、こわれてない～?

h. [(a)の状況後、浴室から出てきて感想を言う]

だからシャワーがさ～、3回ぐらいうそい熱くなったわけ。

強い刺激を好み、刺激が弱ければ不自然になるのは、『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」も同じである。ここで『たら』条件文」と呼ぶのは、たとえば文「蛇にかまれたら傷口を水で洗え」のように、接続助詞「たら」で結ばれる複文であり、ここではそのうち帰結部分でアリサマが表現されているものだけをとりあげる。たとえば次の(12a)の後半の文「2時間もしたらまっ赤だよ」を見てみよう。

(12) a. [酸性に反応すると赤くなるリトマス試験紙を使って実験中]

さあ、溶液に試験紙を浸けた。2時間もしたらまっ赤だよ。

この条件文は条件部分「2時間もしたら」と、帰結部分「まっ赤だよ」を構成要素として持っており、「帰結部分のアリサマ表現」はこの場合「まっ赤だ」に相当する。この「まっ赤だ」は、接頭辞「まっ」によって、甚だしい赤であるという強い刺激を表している。この刺激を弱めると、(12b)のように自然さが落ちる。

(12) b. [酸性に反応すると赤くなるリトマス試験紙を使って実験中]

?さあ、溶液に試験紙を浸けた。2時間もしたら赤だよ。

自然さに関する(12a)と(12b)の違いは一見、品詞の違いによると思えるが、実はそうではない。たしかに「まっ赤」と「赤」は品詞が違う。「まっ赤」は、直後に「の」が付かず（つまり「まっ赤の」は不自然で）、「な」が付く（「まっ赤な」は自然である）ので、品詞は形容名詞である。対して「赤」は、直後に「な」が付かず（「赤な」は不自然で）、「の」が付く（「赤の」は自然である）ので、品詞は名詞である。だが、品詞が違わなくても、(12a,b)と同じことは生じる。次の(12c,d)を見られたい。

(12) c. [酸性に反応すると黄色くなる新型の試験紙を使って実験中]

さあ、溶液に試験紙を浸けた。2時間もしたらまっ黄色だよ。

d. [酸性に反応すると黄色くなる新型の試験紙を使って実験中]

?さあ、溶液に試験紙を浸けた。2時間もしたら黄色だよ。

(12c)の「まっ黄色」は、直後に「な」が付かず（つまり「まっ黄色な」は不自然で）、「の」が付く（「まっ黄色の」は自然である）ので、品詞は名詞である。そして(12d)の「黄色」も、直後に「な」が付かず（「黄色な」は不自然で）、「の」が付く（「黄色の」は自然である）ので、品詞は名詞である。つまり「まっ黄色」と「黄色」はともに名詞であり、品詞の違いはない。にもかかわらず、(12c)は(12a)と同様に自然であり、(12d)は(12b)と同様に不自然である。したがって、以上の文の自然さの違いは、品詞の違いではなく、刺激の強弱によるものである。(12a,c)が自然なのは刺激が強いからであり、(12b,d)が不自然なのは刺激が弱いからである。なお、刺激が弱いと文が不自然になるのは帰結部分がアリサマ表現である場合にかぎられる。明らかにアリサマ表現ではない動詞述語文「2時間もしたら赤になってるよ」「2時間もしたら黄色になってるよ」は、(12b,d)後半とちがって完全に自然である。

以上の「度数表現＋アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」とは少し形が違うが、「いわゆるとりたて詞『ばかり』」も、強い刺激を好むことに変わりはない。たとえば文(13a)を見られたい。

(13) a. 苦いばかりで、少しもおいしくない。

第 6.1.2 節で、文(8a)「赤いボールばかりだ」と文(8b)「??赤いばかりだ」のペアを例に挙げて示したように、「いわゆるとりたて詞『ばかり』」は、モノのアリサマを表す場合は、モノの存在を表す場合ほど自然ではない。しかし、すべてのアリサマ表現が不自然なわけではなく（このことは次の第 6.2.2 節で説明する）、たとえばモノの苦さを表す「ばかり」の文(13a)は完全に自然である。

ここで注目したいのは、この「苦いばかり」に付き得る修飾語句が、次の文(13b-d)の「とにかく」「ただもう」「ひたすら」のように、苦い程度を強める修飾語句にかぎられているということである。

(13) b. とにかく苦いばかりで、少しもおいしくない。

c. ただもう苦いばかりで、少しもおいしくない。

d. ひたすら苦いばかりで、少しもおいしくない。

文(13e)の「ちょっと」のように、

(13) e.??ちょっと苦いばかりで、少しもおいしくない。

苦い程度を弱める修飾語句は不自然である。このことは、いわゆるとりたて詞「ばかり」が、刺激が強いことを好むことの現れと見ることができる。

以上の3表現と違う形ではあるが、「情意表出表現」も強い刺激を好む。ここで言う「情意表出表現」とは、自分の感覚をそのまま外部に漏らす文(益岡の「情意表出型の文」)のことであり^{*18}、モノのアリサマを描写する文(益岡の「演述型の文」)とは区別される。たとえば次の文(14a,b)を見られたい。

(14) a. みそ汁がうまい。

b. みそ汁がちょっとうまい。

モノのアリサマをただ表す文としてなら、文(14a,b)はともに自然である。文(14a)は、たとえば「何かうまいものはありますか?」という質問に対する答として発することができるし、文(14b)も、たとえば「何かちょっとでもうまいものはありますか?」という質問に対する答として発することができる。しかし、話し手が自分の感覚を外部に漏らす情意表出表現としては、文(14a)は自然だが文(14b)は不自然である。たとえば、登山者が昼食を食べる際に、澄んだ山の空気や登山運動によって、持参したみそ汁が大変うまく感じられるという場合、文(14a)を発することは自然だが、持参したみそ汁が少しくまく感じられるという場合に文(14b)を発することは自然ではない。つまり、モノのアリサマ表現とはちがって、情意表出表現は、強い刺激を好む。

以上では、「度数表現+アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」「情意表出表現」という4つの言語

*18 情意表出表現については Kuroda(1973)以来さまざまな研究があるが、益岡(1992, 1997)はこれを情意表出型と演述型に2分している。情意表出型と演述型の詳細については益岡(1991)を参照されたい。

表現が、「刺激の程度が強いことを好む」という共通の特徴を持つことを具体的に示した。ここで、「では、なぜこれら4つの言語表現は、このような共通点を持つのか？」という問題が生じてくるだろう。この問題に答えるには、「これらの言語表現は、体感というインタラクションを中核とする認知体験を表す」と考えることが有効である。刺激とは、環境から認知者への働きかけに他ならない。したがって、刺激が強ければ、体感度は高くなり、環境から認知者への働きかけが活性化する。ひいては、そのインタラクション（体感）全体が、認知者にとって圧倒的なものになる。話し手が知識表現を選択せず、当該インタラクション（体感）を中核とする認知体験の表現を選択することも、それだけ自然になる。具体的な説明は、以下のとおりである。

まず「度数表現＋アリサマ表現」について。体感度の高いアリサマ表現は、アリサマ表現というよりも、認知体験というデキゴト表現である。したがって体感度が高いほど、「ときどき」「3回ぐらい」のような、デキゴトの実現度数を表す度数表現が付くことも自然になる。

次に「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」について。たとえば文「これで負けたら3連敗だ」の「3連敗だ」が、「これで負けること」の実質的意義を表しているように、帰結部分にアリサマ表現を持つ「『たら』条件文」は、条件と帰結が別々の事態¹⁹というよりもむしろ、両者が分かちがたく結びついている点に特徴がある。文「2時間もしたら黄色だよ」の自然さが低いのは、[時間の経過]と[試験紙の色]は本来別々の事態で結びつきが弱いからであり、文「2時間もしたらまっ黄色だよ」の自然さが高いのは、[試験紙の色]が強烈で[時間の経過]との結びつきが強化されるためである。

「いわゆるとりたて詞『ばかり』」についての説明は、探索に関連して第6.1節で述べたことと重なる。つまり「いわゆるとりたて詞『ばかり』」は、複数個の体験の実現パターンを表す。刺激が強いほど、体感を中核とする認知体験は表現しやすくなり、それが複数個あれば「ばかり」は使いやすくなる。

最後に「情意表出表現」について。情意表出は知識表現ではなく、体感を中核とする認知体験表現なので、体感度が高いほど情意表出表現は自然になる。

*19 本稿の「事態」とは、「事」と「状態」、つまりデキゴトと状態を区別せずあわせて指すものとする。

6. 2. 2. 刺激の身体性

4つの言語表現「度数表現＋アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」「情意表出表現」の第2の共通点は、いま述べた第1の共通点とよく似ている。これらの表現は、刺激の身体性が高いことを好むということである。「身体性」という用語はさまざまな意味で使われているが、本稿で言う「身体性が高い」とは、推論や高度な判断を必要とせず、否応なしに感じられやすい、ということである。

まず、「度数表現＋アリサマ表現」が高い身体性を好むことを示す。次の文(15a,b)は「頻度表現＋アリサマ表現」の例である。

(15) a. このシートさっきからときどき痛いんだけど、なんか突き出てない？

b. ?このテレビさっきからときどき赤いんだけど、なんかこわれてない？

文(15a)では頻度表現「ときどき」とアリサマ表現「痛い」が結びついており、文(15b)では頻度表現「ときどき」とアリサマ表現「赤い」が結びついている。文(15a)は自然だが、文(15b)はあまり自然ではなく、文「このテレビ、さっきからときどき赤くなるんだけど、なんかこわれてない？」のように、非アリサマ表現「赤くなる」が現れる方が自然である。文(15a,b)のこの違いは、痛みと赤さの違いと言える。ふつう、痛みは否応なしに感じられ身体性が高いが、赤さは色彩弁別という認知者の或る程度高度な判断があって初めて感じられ、身体性が痛みほど高くはない。次の文(15c,d)は「回数表現＋アリサマ表現」の例である。

(15) c. 私は3回ぐらい痛かったよ。

d. ?私は3回ぐらい赤かったよ。

文(15c)では回数表現「3回ぐらい」とアリサマ表現「痛かった」が結びついており、文(15d)では回数表現「3回ぐらい」とアリサマ表現「赤かった」が結びついている。たとえば、皮膚感覚の実験で「体のいろいろなところに刺激を与えます。痛いと感じたら手元のボタンを押してください」と実験者に指示された2人の被験者どうしが、実験終了後に対話しており、1人が「私、全然痛くなかった」と言ったのに対してもう1人が発する文としては、文(15c)は自然である。これに対して文(15d)は、「画面がいろいろな色に変わります。赤いと感じたら手元のボタンを押してください」と指示される色彩感覚の実験後に、被験者がもう1人の被験者に向けて発するという、文(15c)と似た状況を

想定しても、あまり自然ではない。文(15c,d)のこの違いも、やはり痛みと赤さの身体性の違いと言える。

次に、『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」が高い身体性を好むことを示す。たとえば次の文(16a,b)を見られたい。

- (16) a. [マッサージ機の「特強」ボタンを指さして、すでに試した者が]
これ押したら、気持ちいいよ～。
- b. [新型テレビの「ワイド」ボタンを指さして、すでに試した者が]
??これ押したら、画面が横に長いよ～。

文(16a,b)はともに「たら」条件文であり、文(16a)では帰結部分に「気持ちいい」というアリサマ表現が現れており、文(16b)では帰結部分に「画面が横に長い」というアリサマ表現が現れている。「この「特強」ボタンを押せば、マッサージの強さが特別に強くなり、大変気持ちがよくなる」ということを表す場合に、文(16a)を発することは自然である。これに対して、「この「ワイド」ボタンを押せば、テレビ画面が横に拡張され、画面が横に長くなる」ということを表す場合に、文(16b)を発することは不自然である。文(16a,b)のこの違いは、気持ちよさと画面の長さの身体性の違いである。気持ちよさは否応なしに感じられやすく、身体性が高い。他方、画面の横の長さは、長さ計算や、以前の長さとの比較という高度な処理をともないがちで、身体性は低い。

「いわゆるとりたて詞『ばかり』」が高い身体性を好むことは、われわれはすでに具体的な形で見ている。そこでとりあげた例文を次の(17)にまとめて再掲しておく。

- (17) a. 赤いボールばかりだ。=(8a)
- b. ??赤いばかりだ。=(8b)
- c. 苦いばかりで、少しもおいしくない。=(13a)

文(17a)にくらべて文(17b)が不自然であるように、「いわゆるとりたて詞『ばかり』」は、モノのアリサマを表す場合は、モノの存在を表す場合ほど自然ではない(第6.1.2節を参照)。だが、アリサマ表現の中でも、苦みという、身体性の高い刺激を表す文(17c)は、自然さが高い。文(17d,e)を追加例として挙げておく。

- (17) d. ただただ苦いばかりだった。
- e. ?ただただ赤いばかりだった。

文(17d,e)は副詞「ただただ」によって「ばかり」の意味が強められている。

身体性の高い刺激を表す文(17d)は自然であり、身体性の低い刺激を表す刺激を表す文(17e)はあまり自然ではない。

同様に、「情意表出表現」も高い身体性を好む。そもそも情意表出は話し手だけがおこなえるスピーチアクトなので、他者の情意を表出する文(18a)は不自然であり、話し手の情意を発出する文(18b)だけが自然である。

(18) a. ?こんなにしてもらって、彼はうれしいよ。

b. こんなにしてもらって、私はうれしいよ。

話し手は、(現在の情意と入り交じってはいるが)過去の情意を表出することもある。たとえば文(18c,d)を見られたい。

(18) c. ?あの時は彼もうれしかったよ。

d. あの時は私もうれしかったよ。

他者の情意を表出できないということは、それが現在の情意であっても過去の情意であっても変わらないので、文(18c)は文(18a)と同様、不自然である。だが、過去(あの時)における話し手の情意(うれしい)を表出する際に、話し手が文(18d)を発することは自然である。そして、ここで注意したいのは、文(18d)のように自己の過去の情意を表出できるのは、刺激の身体性が高い場合だけだということである。刺激の身体性が低い場合は、現在の情意は表出できるが、過去の情意は表出できない。たとえば文(18e-h)を見られたい。

(18) e. [彼の現在の考えを表出する表現として]

??彼は答はAだと思う。

f. [私の現在の考えを表出する表現として]

私は答はAだと思う。

g. [彼の過去の考えを表出する表現として]

??彼は答はAだと思った。

h. [私の過去の考えを表出する表現として]

??私は答はAだと思った。

ここでは文(18e,f)は「問題の正答は選択肢Aである」という現在の考えを表出する文として挙げており、文(18g,h)は「問題の正答は選択肢Aである」という過去の考えを発出する文として挙げている。文(18e)は、彼が未来において「問題の正答は選択肢Aである」という考えを持つ、という予言としては自然だが、情意発出の表現としては不自然である。というのは、「問題の正答は選択肢Aである」という考えを彼が現在持っており、それを話し手が直感してい

るとしても、それは他者である彼の内心の情意であって、話し手が彼の内心の情意を表出することはできないからである。文(18g)も、彼が過去において「問題の正答は選択肢Aである」という考えを持った、という描写としてなら自然だが、情意表出の表現としては文(18e)と同様に不自然である。文(18f)は、「問題の正答は選択肢Aである」という考えが現在の自己の考えなので、これを発出することは問題ない。しかし文(18h)は文(18f)とは自然さが一致しない。文(18h)は、話し手が過去において「問題の正答は選択肢Aである」という考えを持った、という描写としてなら文(18g)と同様、自然だが、過去の自己の考えを表出する表現としては不自然である。このように、過去の自己の情意を表出することは、できる場合と(文(18d))、できない場合(文(18h))がある。この違いは身体性の違いである。うれしさという感情と、問題の正答がAだという考えでは、前者の方が身体性が遙かに高い。

以上では、「度数表現+アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」「情意表出表現」という4つの言語表現が、「刺激の身体性が高いことを好む」という共通の特徴を持つことを具体的に示した。このように高い身体性が好まれる理由を説明するにも、「これらの言語表現は、体感というインタラク션을中核とする認知体験を表す」と考えることが有効である。環境から認知者への働きかけ(刺激)が身体性が高く、否応なしの強いものであれば、体感度は高くなり、そのインタラクシオン(体感)全体が認知者にとって圧倒的なものになる。話し手が当該インタラクシオン(体感)を中核とする認知体験の表現を選択することも、それだけ動機づけられる。

7. 体験表現はエビデンシャルか

本稿で取り上げた「ときどき」「で」「た」「ばかり」などの表現は、エビデンシャル(Chafe and Nichols(eds, 1986))にも見える。つまり、これらの表現は、話し手が当該情報を体験を通じて得たことを示す標識にも見える。だが、副題の「疑似エビデンシャル」が示すように、筆者はこれらをエビデンシャル(少なくとも真性のエビデンシャル)とは見なしていない。その最大の根拠は、「ときどき」「で」「た」「ばかり」などは、知識表現にも現れることができるということである。たまたま体験表現に現れた場合にだけ、それらを体験表現の標識と呼ぶことにはあまり意義はないだろう。では、体験表現の標識でない

としたら、これらはどう位置づければよいのだろうか？

8. 体験表現とデキゴトモデル

体験とは一種のデキゴトであり、本稿で取り上げた体験表現は、デキゴトの表現である。観光旅行者がバスの中から街をながめて言う文(1a)「なんか、しょっちゅうレストランがあるね」を例にとってみよう。「レストランがある」とは、環境とのインタラクション（探索）の中で情報「レストランがある」を得るという体験つまりデキゴトの表現である。頻度語彙「ときどき」はこのデキゴトの実現頻度を表している。その街におけるレストランの空間的分布を表すように見えるのはその結果にすぎない。同様に、「こんな品物は日本にしかないでしょうね」と言われて北京帰りの人間が発する文(2a)「北京でありましたよ」とは、環境とのインタラクション（探索）の中で情報「こんな品物がある」を得るという体験つまりデキゴトが、北京で生じたと述べるものである。名詞「北京」に付く格助詞が「で」でよいのは、北京はモノ（こんな品物）の存在場所ではなく、デキゴトの存在場所だからである。山中をハイキング中、目の前に思いがけずサルを発見して発する文(3a)「ほら、あんなところにサルがいたよ」も、環境とのインタラクション（マイクロ探索）の中で情報「あんなところにサルがいる」を得るという体験つまりデキゴトの表現である。この文に「た」が現れているのは、このデキゴトは発話時にはすでに終わっているからである。洋服屋の店員どうしの会話で発せられる文(4a)「あの客は見ているばかりで、ちっとも買わないねえ」の「あの客は見ているばかり」も、「あの客は何か買うのではないかと思って見るが、客は何も買わず商品を見ている」[もう少しすれば何か買うかと思ってその客を見るが、客はやはり何も買わず、商品を見ている][もうそろそろ何か買うかと思って見れば、客はやはり買わず、商品を見ている]のように、環境とのインタラクション（マイクロ探索）の中で情報「あの客は（商品）を見ている」を得るという体験つまりデキゴトだけがずっと続くという表現である。また、文(11a)「お～い、シャワーがさ～、さっきからときどきすごく熱いんだけど～、……」は、環境とのインタラクション（体感）の中で情報「すごく熱い」を得るという体験つまりデキゴトが、ときどき生じるという表現である。さらに、(12a)「さあ、溶液に試験紙を浸けた。2時間したらまっ赤だよ」の後半の文「2時間したらまっ赤だよ」は、環境とのインタラクション（体感）の中で情報「まっ赤だ」を得るという体験

つまりデキゴトが、2時間すれば生じるという表現である。いわゆるとりたて詞「ばかり」の文(13a)「苦いばかりで、少しもおいしくない」の「苦いばかり」も、話題となっているものを味わってみるという、環境とのインタラクション(体感)の中で情報[苦い]を得るという体験つまりデキゴトだけが続くという表現である。さらに、内心表現の文(14a)「みそ汁がうまい」が表現しているのも、環境とのインタラクション(体感)の中で情報[みそ汁がうまい]を得るという体験つまりデキゴトである。

以上の考えは、デキゴト論に大きな影響を及ぼす。まずデキゴト論の流れをごくかんたんに振り返ったのち、以上の考えがデキゴト論に与える影響を示す。

そもそも、デキゴト表現の諸側面を説明するためにこれまで考案されてきたデキゴトモデルの主流は、デキゴトを、モノどうしの力のやりとり、あるいは力の発散ととらえる、「フォース・ダイナミック」なものであった(Talmy(1985)・Croft(1991)・Langacker(1987)を参照)。これらのモデルでは、たとえば、デキゴトを表す文「一郎が窓を割る」の意味は、一郎が窓に力を与え、その力によって窓が形状を変えるという形でとらえられる(図4)。

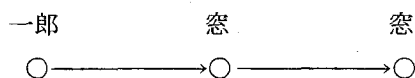


図4：フォース・ダイナミックなデキゴトモデルの例(文「一郎が窓を割る」の場合)

だが、このような力に基づくデキゴトの表現とは別に、力に基づかないデキゴトの表現があることが徐々に注目されてきており、それが特に日本語で多いということも英語や中国語との対照研究において論じられてきている(池上(1981)・中川(1992))。その流れの中で筆者は、力に基づかないデキゴトのモデル(カビ生えモデル)を考案し、さらに、力に基づくデキゴト、力に基づかないデキゴトの両方を可能にするデキゴト認知のメカニズムについて提案をおこなった(Sadanobu(1995), 定延(2000))。たとえば、文「カビが生える」が表すデキゴトを、「何が何にどのように力を与えるか」というフォース・ダイナミックな形でとらえることは、日本語話者の直観とは合わない。これを力とは無縁の、初期の状態[そこにカビはない]から最終的な状態[そこにカビがある]への自然な変化としてとらえるのがカビ生えモデルである(図5)。

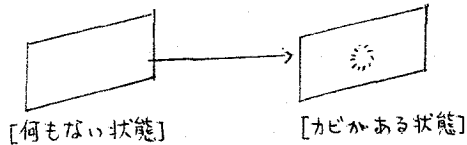


図5：カビ生えモデル（文「カビが生える」の場合）

これらのデキゴトモデルに共通しているのは、「デキゴトは時間の進展を必要とする」という考えである。フォース・ダイナミックなデキゴトモデルにせよ、カビ生えモデルにせよ、時間の進展がなければデキゴトは構成されない。しかし、本稿の考察から明らかになったことは、デキゴトにとって時間の進展は必要でない場合がある、ということである。たとえば、前節でも述べたように、文(1a)「なんか、しょっちゅうレストランがあるね」の「レストランがある」が表しているのは、環境とのインタラクションの中で情報「レストランがある」を得るといふ、デキゴトである。このデキゴトは一瞬であり、そこに時間の進展はない。同様に、内心表現の文(14a)「みそ汁がうまい」が表すデキゴトも一瞬であり、そこに時間の進展はない。これらのデキゴトは、フォース・ダイナミックなデキゴトモデルでも、カビ生えモデルでも説明できない。したがって、フォース・ダイナミックなモデルやカビ生えモデルとは別に、時間進展を含まないデキゴトモデルを考案する必要がある。このモデル（仮に「体験モデル」と呼ぶ）をあえて図示すれば図6のようになる。

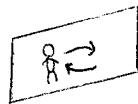


図6：体験モデル（時間進展を含まないデキゴトモデル）

一瞬の状態（たとえば「レストランがある」）はどのような場合でもデキゴトとして表現されるわけではない。状態がデキゴトとして表現されるには、その状態は知識としてではなく、認知体験として表現される必要がある。そのため、認知者と環境とのインタラクションが話し手にとって重要なものになっている必要がある。探索意識と体感度は、このインタラクションを活性化する大きな要因と言える。

言語知識と言語運用という二分法を排し、ありのままの談話データから出発

するという研究パラダイムがますます活発になりつつある現在（たとえば Hopper(1987), Bybee and Hopper(eds., 2001)を参照）、以上のような形でデキゴトを論じることには、根本的な批判があり得るということを、最後に付け加えておきたい。たとえば、実際に言語表現されるデキゴトのほとんどは、[一郎が窓を割る]のようなものとはかけ離れているとして、ホッパーはクロフトのフォース・ダイナミックなモデル（Croft(1991)）を批判している（Hopper(1995)）。このような批判は、フォース・ダイナミックなモデルだけでなく、カビ生えモデルにも、体験モデルにもなされ得るものだろう。筆者はこのような批判を全面的に妥当と認めるものではないが^{*20}、言語研究者が現実の談話データをもっと重視すべきと考える点には共感する。本稿で現実の談話データを扱ったわけではないが、本稿で提出した「知識」「体験」という言語情報の区別は、実際の談話データを分析する際にも有益であるかどうか、今後確かめてみたい。

9. おわりに

本稿は、認知者と環境とのインタラクションが言語表現に及ぼす影響を、現代日本語（共通語）を例にとりて具体的に示した。結論は以下3点である。

第1点。少なくとも現代日本語では知識と体験は表し分けられている。言語情報は情報の共有可能性という尺度に基づき、知識（共有可能性が高い言語情報）と体験（共有可能性が低い言語情報）に連続的ながら二分される。

第2点。現代日本語では、認知という体験は「空間的分布を表すかに見える頻度語彙」「変則的に見える『で』」「発見を表すかに見える『た』」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」「度数表現+アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」「いわゆるとりたて詞『ばかり』」「情意表出表現」のようなさまざまな形で表現できる。これらの表現は、文脈に応じて自然さが変わる。さらに、認知の中核に位置する、認知者と環境とのインタラクションの重要度に応じて、自然さが変わる。認知者と環境とのインタラクションの重要度は、

*20 定延(2002c)を参照。なお、このような立場の違いは、「た」の分析にも見られる。本稿では森田(1995)説を支持せず、井上(2001)・金水(2001)説を支持する立場をとったが、これらの研究とは別に、現実の談話データから「た」を分析した研究に Szatrowski(1987)がある。

探索意識や体感度によって変化する。

第3点。これらの表現は、エビデンシャルつまり情報源を表す表現ではない。「ときどき」「で」「た」「ばかり」その他は、知識表現にも現れることができるからである。これらは、デキゴトについての表現であるにすぎない（たとえば「ときどき」はデキゴトの実現頻度を表すにすぎない）。一瞬のアリサマであり時間の進展がなくても、体験というデキゴトとして表現することは可能である。従来のデキゴト論において提出されてきたデキゴトモデル（フォースダイナミックなモデル、カビ生えモデル）は、時間の進展を含むために、このようなデキゴトを説明できない。

本稿で取り上げた表現の半数以上、具体的には「空間的分布を表すかに見える頻度表現」「変則的に見える『で』」「度数表現＋アリサマ表現」「『たら』条件文の帰結部分のアリサマ表現」は、筆者によるもの以外、これまで研究がない。そして、本稿で取り上げた表現は、従来の考えからすれば異常に見えることもある。具体的にいえば、文「北京でありましたよ」の「で」のように、「変則的に見える『で』」は、従来の考え（モノの存在場所は「で」ではなく「に」で表す）からすれば変則的に見えることもある。また、文「ときどきすごく熱い」のような「度数表現＋アリサマ表現」は、これまで基本的に不自然と考えられてきたものである。以上の事情は、従来の言語研究の中心が知識表現に置かれ、体験表現があまり注目されていないことを物語っている。体験表現の研究は、いまだ研究されていない言語表現に光を当てるという記述的な面でも、知識表現の研究に偏って構築された言語理論を見直すという理論的な面でも価値があるだろう。

* 本稿は、東西言語文化の類型論特別プロジェクトでの講演（於筑波大学、2002年2月23日）の内容の一部を改訂したものである。本稿は、文部科学省科学研究費基盤C（2）「日本語と中国語のとりたて表現の数量的側面に関する認知的対照研究」（課題番号：13610658、研究代表者：定延利之）、基盤研究C（2）「時間表現・空間表現の意味の構造化に関する日本語と中国語の対照研究」（課題番号：13610676、研究代表者：井上優）の研究成果の一部である。

文献

Alfonso, Anthony 1980 *Japanese Language Patterns: A Structural Approach, Vol. 1.*
Tokyo: Sophia University.

- Bybee, Joan, and Paul J Hopper (ed.) 2001 *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Chafe, Wallace L. 1977 "Creativity in verbalization and its implications for the nature of stored knowledge," In Roy O. Freedle (ed.), *Discourse Production and Comprehension*, Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation, pp. 41-55.
- Chafe, Wallace L., and Johanna Nichols (eds.) 1986 *Evidentiality: the Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, NJ: Ablex.
- Croft, William 1991 *Syntactic Categories and Grammatical Relations: the Cognitive Organization of Information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Held, Richard, and Alan Hein 1963 "Movement-produced stimulation in the development of visually guided behavior," *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, Vol. 56, No. 5, pp. 872-876.
- Hopper, Paul J. 1987 "Emergent grammar," In Aske, John, Natasha Beery, Laura Michaelis, and Hana Filip (eds.), *Berkeley Linguistics Society, Proceedings of the Thirteenth Annual Meeting, General Session and Parasession in Grammar and Cognition*, Berkeley Linguistics Society, pp. 139-157.
- Hopper, Paul J. 1995 "The category 'Event' in natural discourse and logic," In Abraham, Werner, Talmy Givon, and Sandra A. Thompson (eds.), *Discourse Grammar and Typology: Papers in Honor of John W.M. Verhaar*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 139-150.
- 星野恵子 1994 「そこが知りたい日本語何でも相談：「ときどき」の正しい使い方は？」, 『月刊日本語』, 6月号, 東京: アルク, pp. 68-69.
- 池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学 — 言語と文化のタイポロジーへの試論 —』. 東京: 大修館書店.
- 井上 優 2001 「現代日本語の「タ」 — 主文末の「…タ」の意味について —」, 青木三郎(編), 『「た」の言語学』, 東京: ひつじ書房, pp. 97-163.
- Iwasaki, Shoichi 1993 *Subjectivity in Grammar and Discourse: Theoretical Considerations and a Case Study of Japanese Spoken Discourse*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Johnson, Mark 1987 *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: The University of Chicago Press. [菅野盾樹・中村雅之(1991 訳), 『心のなかの身体：想像力へのパラダイム転換』. 東京: 紀伊國屋書店.]
- 金水 敏 2001 「テンスと情報」, 音声文法研究会(編), 『文法と音声Ⅲ』, 東京: くろしお出版, pp. 55-79.

- Kuroda, S -Y. 1973 "Where epistemology, style, and grammar meet: a case study from Japanese," In Anderson, Stephen R., and Paul Kiparsky (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, New York: Holt, Rinehart and Winston, pp.377-391.
- Lakoff, George 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之(1993 訳)『認知意味論』. 東京: 紀伊國屋書店.]
- Lakoff, George, and Mark Johnson 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. [渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(1986 訳)『レトリックと人生』. 東京: 大修館書店.]
- Langacker, Ronald W. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1997 "Consciousness, construal, and subjectivity," In Stamenov, Maxim I. (ed.), *Language Structure, Discourse and the Access to Consciousness*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 49-75.
- 益岡隆志 1991 『モダリティの文法』. 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 1992 「表現の主観性と視点」, 『日本語学』, 第 11 卷, 第 9 号, pp. 28-34.
- 益岡隆志 1997 「表現の主観性」, 田窪行則(編), 『視点と言語行動』, 東京: くろしお出版, p. 1-11.
- 森田良行 1995 『日本語の視点—ことばを創る日本人の発想』. 東京: 創拓社.
- 中川正之 1992 「類型論からみた中国語・日本語・英語」, 大河内康憲(編), 『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』, 東京: くろしお出版, pp. 3-21.
- 中川正之 1995 「単語の日中対照」, 『日本語学』, 第 14 卷, 第 5 号, 東京: 明治書院, pp. 64-71.
- Sadanobu, Toshiyuki 1995 "Two types of event models: billiard-ball model and moldgrowth model," *Journal of Cross-Cultural Studies*, No. 4, Faculty of Cross-Cultural Studies, Kobe University, pp. 57-110.
- 定延利之 1999 「空間と時間の関係 — 『空間的分布を表す時間語彙』をめぐって —」, 『日本語学』, 第 18 卷, 第 9 号, 東京: 明治書院, pp. 24-34.
- 定延利之 2000 『認知言語論』. 東京: 大修館書店.
- 定延利之 2001a 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」, 『日本語文法』, 第 1 号, 日本語文法学会, pp. 111-136.
- 定延利之 2001b 「情報のアクセスポイント」, 『言語』, 第 30 卷, 第 13 号, 東京: 大修館書店, pp. 64-70.

- 定延利之 2002a 「現代日本語主節末の「た」試論」, 平成 11 年度～平成 13 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (1), 研究課題番号: 11410086) 研究成果報告書, 『相互行為の民族誌的記述—社会的文脈・認知過程・規則—』(研究代表者: 菅原和孝), pp. 119-132.
- 定延利之 2002b "言表世界の基本構成 — 表示空間分布の時間詞 —," 北京大学外国語学院日本語文化系・北京大学日本文化研究所(編), 『日本語文化論集』, 3, 北京: 北京出版社・文津出版社, pp. 32-45.
- 定延利之 2002c 「「うん」と「そう」に意味はあるか」, 定延利之(編), 『「うん」と「そう」の言語学』, 東京: ひつじ書房, pp. 75-112.
- 定延利之 近刊 「時間から空間へ? : 『空間的分布を表す時間語彙』をめぐって」, 生越直樹(編), 『シリーズ言語科学 4 対照言語学』, 東京: 東京大学出版会.
- 定延利之 準備中 「『で』がモノの所在を表すように見える時」, 『柴谷方良教授還暦記念論文集』, 東京: くろしお出版.
- Szatrowski, Polly E. 1987 "'Pastness" and "narrative events" in Japanese conversational narratives," In Tomlin, Russell S. (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 409-433.
- Talmy, Leonard 1985 "Force dynamics in language and thought," In Eilfort, William.H., Kroeber, Paul D., and Karen L. Peterson (eds.), *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity, Twenty-First Regional Meeting*, Chicago: Chicago Linguistic Society, pp. 293-337.

Toward a grammar of interaction
— an analysis of Japanese pseudo-evidentials —

Toshiyuki SADANOBU

Abstract

A considerable number of linguistic studies have been made on image-schema, but little attention has been given to the interaction between the conceptualizer and his/her environment. Throughout an observation of Japanese pseudo-evidentials this paper shows that interaction as well as image-schema has a great influence on language expressions.

Interaction enables the speaker to express a state as the conceptualizer's experience in two ways. The first way is to express a state as the conceptualizer's experience of probing the environment. The Japanese sentence "Shisenryoori-niwa, karakunai-nomo tokidoki aru (lit. There are sometimes non-spicy Suchuan dishes)," for example, can convey the meaning that some Suchuan dishes are not spicy unless it is uttered (as a monologue) by a chef of Suchuan dishes. This is because a chef of Suchuan dishes knows too much about Suchuan dishes to express his/her experience of probing the world of Suchuan dishes instead of simply expressing the objective knowledge "Some Suchuan dishes are not spicy".

The second way is to express a state as the conceptualizer's somatic reaction to environmental stimuli. Thus the Japanese sentence "Watashi-wa sankai itakatta (lit. I was painful three times)" is more natural than the sentence "Watashi-wa sankai akakatta (lit. I was red three times)," because the cognition of pain is more somatic and primitive than that of color in that the latter needs judgment of color category.

Since an experience is a kind of event, interaction allows a state to be expressed as an event, which means that an event does not necessarily have time shift as its factor, distinct from the event models previously suggested.